

1 3. 肥育養豚場で発生した豚結腸スピロヘータ症

大分家畜保健衛生所

○本多祥宏・渡邊春香・丸山信明・安部行倫
病鑑 滝澤亮・病鑑 壁村光恵・病鑑 山田美那子

【はじめに】豚結腸スピロヘータ症の原因菌である*Brachyspira pilosicoli*(Bp)は、ヒト及びイヌ、鳥類からも分離され、広い宿主域を有する人獣共通感染症の原因菌であり、家畜衛生上及び公衆衛生上重要な細菌である。今回、管内養豚場において下痢症状を呈する豚が多発する例に遭遇し、豚結腸スピロヘータ症と診断したのでその概要を報告する。

【発生の概要】当該農場は生後90日前後の肥育素豚を導入し約4ヵ月肥育し出荷を行う肥育経営であり、約2000頭を常時肥育している。2010年8月に県外2箇所の農場(A、B農場)から導入した素豚で、A農場由来の豚群(111日～121日齢)60頭中半数以上で、導入直後から茶褐色の水様性下痢または粘液の付着した軟便を認めたため、病性鑑定を実施した。著しい消瘦は認められず、死亡はなし。B農場から導入された群は症状は認められなかった。

【材料及び方法】細菌学的検査：発症A農場群7頭及び20日後のA農場群5頭、B農場群5頭、隣接群5頭の直腸便についてPCR法及びnested-PCR法により、*Brachyspira hyodysenteriae*、Bp、*Lowsonia intracellularis*の特異遺伝子断片の検索。BJ培地にて*Brachyspira*属菌の分離。常法により溶血性大腸菌、*Clostridium*属菌、サルモネラ属菌の検索。

ウイルス学的検査：発症A農場群7頭についてRT-PCR法により豚伝染性胃腸炎ウイルス(TGEV)及び豚流行性下痢ウイルス(PEDV)の特異遺伝子断片の検索。下痢発症豚5頭のペア血清で、TGEV抗体及びPEDV抗体の中和試験。

病理学的検査：20日後正常性確認のため剖検し、主要臓器、消化管についてHE、鍍銀染色。

寄生虫検査：発症A農場群5頭、B農場群5頭、隣接群5頭でコクシジウムの検索。

【検査成績】細菌学的検査ではBpが直腸便7/7頭から分離され、その他の病原因子は検出されなかった。分離されたBpはペニシリン系、テトラサイクリン系薬剤が有効であった。ウイルス学的検査ではTGEV特異遺伝子断片が3/7頭から検出され、ペア血清ではTGEVに対する抗体の有意な上昇が確認された。その他コクシジウム等の病原因子は検出されなかったことから、本症例を「TGEVが関与した豚結腸スピロヘータ症」と診断した。

20日後の直腸便及び別群の直腸便からBpは分離されず、その他の病原因子も検出されなかった。解剖所見では結腸粘膜面の軽度の充血が認められ、病理学的検査では慢性腸炎像が観察されたが、鍍銀染色で結腸陰窩腔内に大型スピロヘータは認められなかった。

【まとめ及び考察】豚結腸スピロヘータ症は、豚赤痢ほど劇症ではなく死亡は稀であるため報告例はほとんどない。本症例ではBpが全頭から分離され、有効なアモキシシリン等薬剤投与を指導し、発生の終息が見られたことから、下痢の主原因はBpによるものと考察した。また、TGEVの感染により下痢症状が助長されたことが発見の一因とも考えられた。臨床症状を呈する豚からのBpの分離報告は国内初であるが、欧米では潜在的経済損失が問題となっている。本疾病は、成長期の豚に消耗性下痢を起こし、肥育期間の延長と飼料効率の低下をもたらすとともに、公衆衛生上も重要であることから、豚赤痢と並び今後重点的に指導していきたい。